

錢形平次捕物控

三千両異変

野村胡堂

青空文庫

一

「おや、八五郎親分、もう御存じで？」

「知らなくつてき。隠したつて駄目だよ、真つ直ぐに申し上げた方がいいぜ」

ガラツ八の八五郎が、浜町河岸で逢つたのは、廻船問屋浪花屋^{なにわや}の奉公人、二三本釘^{くぎ}の足りない江戸っ子で、雑用にコキ使われて
いる釜吉^{かまきち}でした。

五月二十八日の川開きが昨夜^{ゆうべ}済んだばかり、朝の浜町河岸は埃^ご
溜^{ため}を引っくり返したようですが、その中に何かしら事件の匂い

を嗅ぐともなく、人の顔ばかりを見て歩いて来た八五郎だったのです。

「恐れ入ったネ、八五郎親分、あれを御存じとは」

何の事やら判りませんが、素人衆が岡つ引を買い被るのがこつちの付け目で、八五郎はこんな相手から、事件の端緒^{いとぐち}を引出すことにかけては、親分の錢形平次に、毎々舌を卷かせるほどの名人だったのです。

「それはね、餅は餅屋だ。どんな事でも、一刻^{いっとき}（二時間）と経たないうちに、俺達の耳に入るから不思議さ」

八五郎がこんな時ほど賢そうに見えることはありません。毛虫眉^{ひそめ}を顰めて、大きい口^{きつ}を屹と結ぶと、不思議なことに、長い顔^{ながが}も、

少しばかり寸が詰ります。

「あの土蔵の穴を見付けたのは、ほんの半刻（一時間）前で、
親分」

「そうとも」

「あの辺はお隣の物置の裏で、容易に人の行くところではなし、
足跡でもなきやア、氣の付く場所じゃありません」

「そうだってね」

「もつとも、よく氣を付けて見ると、庭の方まで少し漆喰しっくいがこ
ぼれていましたよ」

「それが天罰と言うものだよ。
娘むすめ師が漆喰をこぼしたり、鋸のこぎりを

忘れたりするようじゃ——」

「鋸は物置から出して使ったんだ、親分」

八五郎はとうとう、釜吉の口くちぶり吻から、昨夜浪花屋の土蔵が、

娘師に見舞われたことを嗅ぎ付けてしまったのです。

「それは物の譬たとえだ。——ところで盗とられたのは？」

「それが不思議で、何を面喰らったか、泥棒の拵こしらえた穴が、人間が入るにしちゃ、少し小さすぎましたよ」

「ハッハッ、ハッ、そいつは大笑いだ」

「ハッハッ、全く変な話じゃありませんか。——おや、お帰りで」
八五郎はそれっきり釜吉に背を見せて、柳原の方へ足を向けたのです。

「まア御免を蒙こうむろう、自分の身体の入らない穴を拵える娘師なん

かと付き合つちやいられねえ」

「でも、旦那は大騒ぎですぜ、何しろあの土蔵の中には、明日の船で大坂の本店へ持つて行く三千両の小判の外に、金が唸^{うな}るほどあるんで」

「金持は心配が絶えないよ」

八五郎はすっかり興味を失いました。土蔵に小さい穴なんか掬える泥棒と掛り合っているにしては、五月二十九日の朝は、あまりに美しく晴れ渡っていたのです。

それから親分銭形平次の家まで、どんなに長閑^{のどか}な心持で辿^{たど}ったことでしょう。

「親分、お早う」

「大層^{いい}機嫌だなア、八、寝起きの良い子は育つよ」

平次は朝飯が済んだばかり、爽^{さわ}やかな陽の中に、盆栽の緑を楽しんでおりました。

「新堀^{しんぼり}の浪花屋の土蔵へ穴を明けた野郎がありますよ」

「そうかい、相変らず早い耳だ。盗られたのは？」

「それが可怪^{おか}しいんで、せつかく穴は拵えたが、あんまり小さくて、泥棒が入れなかったそうですよ。間拔けな話じゃありませんか」

八五郎はいかにも面白そうでした。

「それとも手先に子供か猿を使っていたかな」

「えッ」

平次の觀察の鋭さ、ガラツ八もこう言われると、今さら自分の迂闊うかつさに気が付きます。

「そいつは面白そうだ。行つてみようか、八」
平次は立上がりました。

二

平次とガラツ八は、時を移さず南新堀町の浪花屋へ飛んで行き
ました。豊海橋とよみばしを距へだてて御船手屋敷と相對した、大きな廻船問
屋で、主人の又左衛門またざえもんは四十二三の年配、錢形平次が行くと、大
喜びで迎えてくれます。

「これは、錢形の親分さん、御苦勞様で、——釜吉の野郎が、つまらない事を子分衆の御耳に入れたそうで恐れ入りました。私どもにしては、お願いしても見て頂きたいところですが、盗られた物もないところを、お出でを願つてはどうかと、実は御遠慮申上げておりました」

下へも置かぬあしらいです。

「娘師が身体の入らない穴を明けるなんて、滅多にない事だ、——悪い手口が流行^{はや}らなきやアいいが。ともかく、そこを見せて貰いましょうか」

「まだそのままにしてあります。小さくても穴を明けたのを放つてもおけませんから、今左官を呼びにやりましたが——」

主人の又左衛門はそんな事を言いながら、土蔵の裏へ案内してくれました。音に響いた廻船問屋で、土蔵は幾戸前いくこまえもあります。が、それは道を距てた河岸つ縁の荷庫で、貴重品にぐらを入れる土蔵というのは、家の裏に大きいのが一と戸前だけ、その裏へ廻ると、隣の物置とじめじめした路地を距てて、滅多に人の来るところではありません。

「おや、銭形の親分さん、お早うございます」

泥棒の拵えた穴の前に踞しゃがんで、頻しきりと中を覗いているのは、先ほど八五郎に事件を教えてくれた下男の釜吉です。

「……………」

平次は眉を顰ひそめました。悪気はなかったでしょうが、せっかく

生^{なましめ}湿りの土に残しておいた泥棒の足跡などは、滅茶滅茶に踏み荒らしております。

「旦那、泥棒の足——って言いますが、随分大きいんですね。私のとあんまり違いますよ」

わずかに残る足跡へ、釜吉は自分の足を持って行つて重ねて見るのでした。年配三十七八、深川生れを自慢している男ですが、荷揚げ人足から正直さを見込まれて、浪花屋のお勝手向きの小用^{こよう}を足し、時には飯も炊けば、庭も掃くといった調法者です。

「おや？　泥棒の足跡へピタリと合うじゃないか」

八五郎は驚いて口を出しました。

「だから不思議なんで、まるで俺がやったようなものだ。もっと

も俺がやるなら、この三層倍もでっかい穴を明ける」

どうも少し調子が変わです。

「昨夜川開きに出掛けたのは何人でしょう」

平次は又左衛門のむつかしい顔を見やりました。商売にも道楽にも強いと言われた又左衛門は、町人らしくない線の太い男です。「皆んな出かけましたよ。留守番は私と釜吉と、下女のお久ひさだけで、——その代り三人は家からちよつとも出ません」

「その頃やられたんですね。お隣が近いから、夜中じやこんな荒仕事は出来ません。鋸なんか、思い切った使いようですよ」

土蔵の海鼠壁なまこかべを掘って、土台上を嚴重に固めた、栗の角材を

鋸ひき切った仕事は、宵の花火騒ぎにでも紛れなければ出来ないこ

とです。

が、せっかく切り開いた穴は入口でせいぜい一尺四方、中は栗材に妨げられて、大の男ではとても肩が入りません。

「鋸も鋤くわもみんな物置から出して使つてありますよ。憎いじゃありませんか」

又左衛門は穴の前に捨てられた鋸と鋤を指して、苦笑いしております。

「それにしちや、草鞋わらじをどこへやつたろう」

「え？」

「大きな草鞋を突っかけて仕事をしたに違いない。足跡は大きい
が、爪先と踵かかとが反つて柔かい土へ舟形にめりこんでいるでしょう」

「なるほど」

平次の慧眼けいがんに一番先に感心したのは、やはり又左衛門でした。

「釜吉さんとか言ったね。——お前さんの草鞋がなくなっちゃいないだろうか」

平次は釜吉を顧みました。

「勘定したことはありませんが、私の草鞋は大きいから盗んでも役に立ちませんよ」

釜吉は一向無関心に、十二文半甲高の足を出して見せるのでした。

「この様子じゃ大した事はありませんね、仕事はいかにも素人臭いし」

平次はすっかり興味を失つたらしく引揚げます。

「親分、——この中には明日大坂へ積出す千両箱が三つ、外ほかにいろいろ大切な品がありますが、どうしたものでしょう」

又左衛門は平次の冷淡さが気に入らない様子でした。

「あつしには工夫がありません。旦那の氣の済むようになすつちやどうです」

「家へ持つて来て、寝ず番でも付けようと思いますが」

「……………」

平次は点頭うなずいて見せました。三千両と言えどんな大身代にしても容易ならぬ大金です。

「とんだお骨折りでございました。お茶でも入れますから——」

又左衛門に案内されると、平次は遠慮する様子もなく浪花屋の奥へ通りました。

大番頭の佐兵衛は六十を越した老人で、忠実一点張りの男、本店からの付け人で、謂わば主人の又左衛門の後見役でもあったのです。

二番番頭の和助は三十三の好い男、少し臆病で柔和すぎるくらいはありますが、強か者の又左衛門とは案外馬が合つて、佐兵衛をそつちのけに、相談相手にもなり、遊びの付き合いもするといった人柄でした。

あとは丁稚小僧ばかり、一期半期の奉公人で取立てて言うほどの人間はありません。

又左衛門は三年前に本妻が死んで、子供のない淋しさを慰めるために、長く外に囲^めつていた妾^{めかけ}のお妻^{つま}を家へ入れました。これは二十七八の水の滴^{したた}るような美しい女です。

先妻の死んだ当座は、後添えを世話する親類もありましたが、お妻に遠慮するともなく、そんな話も絶えて、今では祝言をしたわけではありませんが、浪花屋の世帯を結構切つて廻すようになっております。

これはすべて、この後に起つた大事件の後で、平次とガラツハが調べ抜いたことですが、この日は一応引合せられて、お妻の拔群な綺麗さと、商売人上がりらしい取成^{うま}しの巧^{うま}さに感心しただけの事です。

三

「親分、た、大変」

翌^{あく}る日の朝、——まだ薄暗い路地を鉄砲玉のように飛んで、平次の家の格子^{こうし}を叩いたものがあります。

「どなた？」

土竈^{へつつい}の下を焚^たきつけていたお静が、姐^{あね}さん冠^{かぶ}りを取って顔を出します。

「浪花屋の釜吉でございます。大変なことが起りました、親分さんへすぐお出でをお願いします」

「釜吉さんか、どうしたんだ」

あまりの騒ぎに、平次も寝起きの顔を出しました。

「番頭の和助さんが殺されましたよ」

「えッ」

今度は平次の方が驚きました。

「その上、三千両は消えてなくなっただけ」

「一緒に行こう、ちよいと待ってくんない」

平次は顔を洗っただけ、飯も食わずに飛出して、道々釜吉から、いろいろの話を引出しました。が、釜吉は健康な胃の腑ふの持主で、三千両の夢も見ずに眠ったらしく、何を訊いても一向要領を得ません。

浪花屋へ着いてみると、上を下への騒ぎです。

「親分さん、大変なことになりました。和助も可哀想ですが、あの三千両を奪^とられちゃ、浪花屋が立ち行きません。何とかして取り返す工夫はないものでしょうか」

朝のうちに出る船を一応は待たせておいて、主人の又左衛門泣かぬばかりの頼みです。

「とにかく、奥の様子や、番頭さんの死骸を見せて貰いましょう」
平次は店から入って、土間を奥へ突抜け、そこから、主人の部屋と、その隣の千両箱を三つ置いたという部屋を見せて貰いました。

「ここでございますよ、親分さん」

店と奥の境、ちようど庭木戸を入った雨落ちのところに、番頭和助の死体が、菰こもを被せてありました。検屍けんしが済むまで、そこから家の中へ運び入れるわけにも行かなかったのです。

「後ろから飛付いて、手拭で頸くびを絞めたんだね——これじゃ声を立てるわけにも行かなかったろう」

怨みうらを呑んで死んだ和助の死体からは、たったそれだけの事しか解りません。

木戸は開いたまま、この辺はお天気続きでよく乾いているので、足跡は一つもありませんが、この木戸は思いのほか嚴重で、外からは開けた様子も見えなかったのです。

「くせもの曲者は和助に木戸を開けさせて入ったようでございます」

又左衛門が説明してくれるまでもなく、平次にはそれがよく解りました。木戸が内から開いて、番頭が絞殺されているのですから、曲者は番頭の知っている者——どうかしたら、和助の手引で押込んだ者でなければなりません。

三千両の金を三つの千両箱に入れて、夜つびて見張らせていたというのは、和助の死体のあるツイ前の部屋で、そこには老番頭の佐兵衛が、茫然ぼうぜんと気拔けがしたように坐っておりました。

「親分さん、みんな私の粗相でございました。宵のうちは旦那様、よつ亥刻けがた（午後十時）から丑刻やつ（午前二時）までは和助、その後は曉あ方まで私が見張ることになっておりましたが、宵から腹痛はらいたを起して、何としても我慢がなりません。隣の部屋にいる和助どん

を起して、ほんのしばらく代つて貰つて、かわや廁へ行つたのは、かれこれ、寅刻ななつ（午前四時）でございました。用を済まして、歸つてみると、和助どんは見えません。が、床の間の千両箱にも変りはないし、大方眠くなつて隣室となりに敷いた床の中へ潜り込んだものと思ひ込み、——御苦勞——と声だけ掛けて、そのまま夜を明かしてしまいました。明るくなつてから氣が付くと、雨戸の締りが外してあつて、外には和助どんが死んでいるじゃございませんか——

老実らしい佐兵衛の話で、前後の事情はよく解りますが、それにつけても、和助が曲者と共謀ぐもだったことは疑いいを容れません。たぶん和助に引入れた曲者は三千両の小判を手に入れると、

和助を殺して逃げてしまったのでしよう。

「和助の身持はどうでした」

平次はもうそこまで突っ込んで考えております。

「私の口から申しちや何ですが、あまり良い方じやございません。
外の奉公人の示しもありますし、^{ほか}チヨイチヨイ叱言^{こごと}を言つてやり
ましたが——現に『寿』の女中とも——」

「ちよいと、旦那様」

不意に又左衛門の口を塞^{ふさ}ぐように、横合から声をかけた者があ
ります。

「何だい、お妻」

「そんな事をおっしゃつては、死んだ和助が可哀想じやございま

せんか」

蒼い顔をしたお妻が、訴えるように又左衛門を見上げているのでした。少し取乱した様子も、この女らしくないたしなみの悪さで、事件が何となく容易ならぬ深さを持っていることを、平次が感じないわけには行きませんでした。

「親分さん、その床の間の三つの千両箱が、今朝になつて気が付いてみると、三つとも空っぽになっているじゃありませんか」

「……………」

平次は点頭うなずきました。又左衛門に説明されるまでもなく、釜吉の話や、いろいろの情勢で、そのくらのことは解っていたのです。

「それも箱を開いて、中から小判を抜いたんじやございません。丁寧に空箱を持って来て、そつと入れ換えたのは憎いじやございませんか」

佐兵衛もそれを言う時は、老実な顔に、サツと一と刷毛はけふんぬ憤怒が走ります。

「手数なことをしたものだ。夜の明けるまで人に気が付かれないようにするつもりだったろう」

平次は部屋の中へ入って、床の間に積んだ三つの千両箱を調べましたが、それは古びの付いた細長い箱で、金具こそ嚴重ですが、中は開けて見るまでもなく空っぽ、何の特徴もない代物しろものです。

「こんな箱は沢山あるでしょうな、こちらなんかには？」

「へエ、京、大坂へ折々金を送りますから、土蔵の中には十二三用意がございます」

「目印はありませんか」

「その時その時貼紙をしますから、目印といつてもございません。もつとも箱の隅には焼印が捺おしてありますが、この箱は御覧の通り店名の焼印を削り取っております。どこから持込んだか解りません」

「フーム」

平次も少し持て余し気味でした。煙のごとく消えた三千両の行ゆ方が判くれば、自然和助殺しの下手人も知れるでしょうが、それが、容易に判りそうもないのです。

四

「親分、大変な事になりましたね」

ガラツ八はその時やつと顔を出しました。

「八、様子を聞いたか」

「ヘエ——、あの釜吉とすっかり仲が好くなりましたよ。あんな面白い男はありやしません。訊かない事までみんな饒舌しゃべつてしまいます」

「お前とは反りの合いそうな人間だ」

平次は苦笑いしました。なんが長い顔と、抜群のノツポと、出来の悪

い神田つ子と、日当りのよくない深川つ子と、江戸の人間にもこんながあると思うだけでも、ひどく頼もしくなります。

「笑ったもんじゃありませんよ。大きい声では言われないが、——例えば、殺された和助と、お妾のお妻とはとんだ好い仲だったなんて事は——」

「シツ、小さい声で物を言え」

平次もそれは察しておりました。主人の又左衛門が、死んだ和助の非難めかしい口吻こうぶんを漏らした時の、お妻の剣幕というものはなかったのです。

「親分は気が付いていなさるんで——」

「そんな事はどうでもいい、三千両の行方を捜すんだ」

「へエ——」

「三千両といや大金だ。持ってみた事はねえが、一両四匁もんめずつとして、風袋ふうたい抜きでも十二貫、生優しい人間じや持運びの出来る荷物じゃねえ」

「なるほど」

平次とガラツ八は、その辺中を捜し廻りました。物置も、縁の下も、埃溜ごみための中も——。

「井戸の水が急に濁るような事はないか、お勝手に訊いてくれ」
「心得た」

ガラツ八は飛んで行きました。その後へ、
「親分、上かみしも下せっちゃんの雪隠を搔き廻しましたが、臭くせえの臭くねえの」

釜吉がフラリと現われて、そんな事を言っております。

「そんな馬鹿なことをする泥棒があるものか、後で持運びのならねえ場所へ小判を隠すわけはねえ」

平次もこれには少し驚いた様子です。

井戸にも何の異状もなく、屋根の上の天水桶の中まで見ましたが、三十両はおろか、たった三両の小判もありません。

搜索の手はそこから往来を距てた荷物庫の方まで伸されまし

た。主人の又左衛門始め、丁稚小僧まで加わって、大地を掘らぬばかりに捜し抜きましたが、三千両は遠く持去られたものか、浪花屋の居廻りには、片^{かけ}らも見えなかつたのです。

そのうちに、船を出す刻限は過ぎて、荷主から大文句がやって

来ます。

本店へは詫び状を出して、三千両は次の便船まで待つて貰うことに決め、ともかくも一段落を付けたのは辰刻いつつ（午前八時）過ぎ、川一つ距てた組屋敷から、わざわざ同心の出しゅつやく役があつて、検屍を済ませたのは辰刻半、浪花屋の内外は煮えくり返るような騒ぎです。

「番頭さん、土蔵の中を見せて貰えませんか」

昼近くなつてから、平次は妙なことを言い出しました。

「土蔵はあれつきり開けません——」

佐兵衛は変な顔をしましたが、平次の思い込んだ様子を見ると、鍵をガチャガチャさせながら、後に跟ついて行きます。

土蔵の穴は昨日きのうのうちに修復して、ちよいと見は何の変化もありません。

中へ入ってみると、さすがに大おお店で、道具類は足の踏み場所もないほど用意してありますが、平次の注意を惹ひくほどの物はなかった様子です。

「あれは？ 番頭さん」

「錢箱でございますよ。千両箱と申したところで、御用金でもなければ、金千両と書いた、酉とりの市いちの熊手へブラ下げるような箱へ入れるわけじゃございません」

「中には何が入っているんだえ」

「十二三ありますが、大抵は空っぽです。三つ四つガラクタの入

ったのがあるでしょう。何しろ三千両入ったのは家へ持って行きましたから、どこにも何にもありやしません」

平次は佐兵衛の説明を聞きながら、積んだ錢箱を動かしてみたりしていました。古びの付いた細長い箱で、重いのも軽いのもありますが、上の三つ四つを除けば、埃がほこり一パイ付いて、どうすることも出来ません。

「泥の付いたのがあるね、番頭さん」

「大坂へ現金を送る時、上のはよく使いますよ。何かの拍子に泥の上へ置いたんでしょ」

「なるほどそんな事もあるだろう。が、番頭さん、数は減っちゃいませんか」

「とんでもない、親分」

佐兵衛は事もなげです。

五

「親分、三輪みのわの万七まんしち親分が乗り出しましたぜ」

ガラツハはまた何か嗅ぎ出して来ました。あれから五日目、さすがの平次も手の下しようもなく考え込んでいたのです。

「三輪の兄あにき哥はどんな事をしているんだ」

と平次。

「お上の帳面にあるほどの娘師の疑いのあるのを、片っ端から縛

つてますよ」

「……………」

「浪花屋の番頭殺しは、前の晩の土蔵破りに違いないという見込みで」

「俺もそう思うが、あの手口はどうも玄人くろうとじゃねえ」

「へエ——」

「それに、浪花屋の商売は近頃やり繰りがあるそうだ。三千両なんて金は最初からなかったんじゃないかな」

「そんな事があるでしょうか、親分」

平次の話はガラッ八を仰天させました。

「三千両の金を本店へ送る日にちげん限が来たので、あんな苦しい事を

したのじゃないだろうか」

「釜吉は浪花屋には金が唸^{うな}っているような事を言いましたぜ」

「あの釜吉だつて怪しいよ、——馬鹿だか伶俐^{りこう}だか判つたものじやない。土蔵が破られた事を、一番先にお前に話したのはあの男だろう」

「へエ——」

「今までいろいろの悪党にも逢つてみたが、どんな太い奴でも、悪い事をした覚えのある人間は、岡っ引を見ると、黙つちやいられないものだ。——一番先に告げ口上する奴は一番怪しいよ」

「……………」

「それにあの男なら力がありそうだ。和助を絞めてから、三千両

ぐらゐの小判は、あつという間に五町や十町先へ隠せるだろう。
みなとばし
湊橋 か豊海橋あたりへ、相棒の舟でも来ていちや、判りつこ
はねえ」

平次の話は妙に釜吉に絡んで行きます。

「でも親分は、土蔵破りは足の小さい男で、釜吉の草鞋わらじを盗んで
履いた人だつて言いなすつたじやありませんか」

ガラツ八は少しばかり友達の弁護をしたくなった様子です。

「判らないのはそこだけだ。わざと自分の草鞋を突っかけて、爪
立ちして歩いたらあんな工合にならないものかしら——」

「釜吉にそんな器用なことが出来るものですか」

ガラツ八は躍起となりました。

「それじゃ、八、こうしてくれ」

「へエ」

「幸いお前は釜吉と仲が好いようだ。俺が訊いたんじや言わねえから、これだけの事を訊いてくれ。——川開きの晩に、主人の又左衛門はちよつとも外へ出なかつたか。それから、土蔵から千両箱を三つ運んだのは釜吉だというが、一つ一つが四五貫の重さがあつたか。それからもう一つ、主人は和助とお妻の仲に気が付いている様子だつたか——これだけ訊き出すんだ」

「へエ」

「言わなきやア、構うことはねえ、平次は手前てめえを疑っているから、縛られねえ用心をしろと言やいい」

「殺^{せつ}生^{しょう}だね、親分」

「何が殺生なものか、嘘を吐^つかせるんじゃないやねえ、本当の事を言わせるんだ」

「へエ」

ガラッ八が飛んで行くと、入れ違いに来たのは二十七八の女。

「浜町のお桑^{くめ}でございます。親分さんにお問い合わせがあつて参りました」

お静に口上を取次がせました。「寿」という料理屋の女中で、通^{つう}人^{にん}達にはよく知られた年増、氣象の優れたのと、取廻^{うま}しの巧いので有名な女です。

「お桑さんかい、なんだえ、用事つてえのは。滅法忙しいから、

情事いろいろとの出入りに口をきくのは御免だよ」

平次は打ち萎しおれたお糸を迎えて、こんな事を言います。

「そんな暢気のんきなんじゃありませんよ、親分さん、敵かたきを討つて下さい」

「何だい、びっくりさせるじゃないか、いきなり泣き出したりして。——お前の父親の敵なら、酒じゃないか、三年前に中風で死んだはずだ。お袋はまだ達者だろう、二三日前にも柳橋で逢ったぞ」

「親分さん、そんな話じゃありません。何を隠しましょう、亭主の敵で」

「へエ、お前は亭主持ちだったのか」

「浪花屋の和助さんと、今年の秋は世帯を持つはずで、内々家まで捜していました」

「待ってくれ、それはお前、大変なことじゃないか」

「和助さんは内緒にしてくれと言うんで、誰にも言いませんが、二人の仲は母親も承知しておりました」

お糸は眼ばかり拭いております。

「和助は好い男だったから、方々へ罪を作ったことと想っていたが、女房持ちとは知らなかった」

「そんな事はどうでもようございます。それより和助さんを殺した下手人は私によく判っております。親分さん、人を殺してノメノメと生きていいものでしょうか」

「まるで俺が叱られているようだ。その下手人というのは一体誰なんだ」

「あの阿魔ですよ」

「何？」

「浪花屋の妾、今ではお内儀かみのような顔をしている、あのお妻の阿魔に違いありません。私と和助さんの間を割さこうとして、一年越し細工をした挙句、うまく行かないので和助さんを殺したのでしよう。あんな綺麗な顔をしているくせに、ありや鬼のような女ですよ」

嫉妬に狂ったお糸は、埒らちもないことを言い募ります。

「待ってくれ、お糸。——土蔵に穴を明けたり、大の男を絞め殺

したり、三千両の金を持出したり、そんな事が女に出来るわけはねえ。お前は何か恐ろしい勘違いをしているんじゃないか」

「勘違いなんかするものですか。お妻が下手人でなきやア、お妻に変な素振りをする釜吉とかいう下男をそそのか嚇して、憎い和助さんを殺させたに違いありません」

「お妻でなきやア、釜吉が怪しいと言うのかい。そんな見当じや敵の討ちようはねえ」

「親分、証拠のない事を言やしません。お妻は浪花屋の旦那に囲われる前から、和助さんとは好い仲でした」

「何だと？」

「あれは元柳橋の芸げいしや妓じゃありません。酢でも蒟こんにやく蒟でも喰

える女じゃございません」

「話は段々面白くなりそうだ。まあいい、二三日待ってくれ、お前の亭主の敵は討つてやるから」

平次は何やら思い当ることがある様子です。

ガラツ八の報告には、平次が考えた以上のことは一つもありません。

五月二十八日の晩、川開きの花火見物に、お妻以下奉公人は全部出かけ、留守番は主人又左衛門、下男釜吉、それに下女一人だけ。又左衛門も釜吉も、家から外へはちよつとも出なかったと判りました。従つて、土蔵を破つたのは、又左衛門や釜吉でないことは確かです。

和助とお妻の關係は、又左衛門は悉く知つていた様子ですが、何か仔細があつたものか、嫉妬らしい言葉も聞いた者がありません。

寛大なのか、諦めてあきらまっているのか、奉公人達にも判らなかつた様子でした。

土蔵から三つの千両箱を運び出したのは、力自慢の釜吉に相違ありませんが、その時は一つ三貫目はあつたということで、これも平次の予想は外れた形です。

「そんなわけですよ、親分。釜吉と主人の又左衛門が下手人でないことは確かで——」

「それから、生薬屋きぐすりやはどうした」

平次は妙な事を問います。

「あの辺の生薬屋は一軒残らず訊いて歩くと、茅場町かやばちように浪花屋の番頭さんに下剤のだいおう大黃を売ったという店がありましたよ。名前は知らないと言いましたが、親分の察した通り、人相は殺された和助のようです——」

「フーム」

「それからもう一度浪花屋へ取って返して下女に訊くと、あの千両箱の見張りをした晩、年寄りの佐兵衛は喉のどが渴くと言って、番茶をガブガブ飲んでいたそうです。お茶の出がらしはどこへ捨てたか解りませんが、番頭の佐兵衛に当ってみると、あの晩宵に飲んだ茶は少し苦かった——と言っていましたよ。やはりお茶の中

へ大黃を入れて、夜中に厠へ立たせたんですね」

「よしよし大方それで解ったよ、御苦労」

企みの深さが、段々平次には解って行く様子です。

下手人はまだ解りませんが、平次はおおよそ見当が付いたらしく、越えて六月五日、新堀の浪花屋に、与力よりき笹野新三郎の出役を

お願いして、関係者一同を調べて貰いました。その頃はもう、町

奉行の調べは形式ばかりで、大概の事件は、御用聞と与力同心が

下調べをし、動かぬ証拠固めをしなければ、奉行所のお白洲しらすへは

持出さなかったのです。土蔵の内外、和助が殺された現場、空つ

ぽの千両箱などを一応笹野新三郎に見て貰った上、浪花屋の主人

奉公人一同、空つぽの千両箱を置いた奥座敷の縁側に呼出されま

した。

「お白洲じゃないから、四角張るには及ばない。あつしが順序を立てて話すから、違ったら、違つたと言つて貰おうか」

平次はズイと一同を見廻しました。

「第一番に、浪花屋には三千両という金は最初からなかった」

「親分、それは」

主人の又左衛門は顔色を変えて乗出しました。

「嘘だと言うのかえ、それじゃ帳面を突き合せてみるがいい。近頃道楽が嵩^{こう}じて、出資が多い上、不義理の借金が積つてどうすることも出来なかつた。佐兵衛は年寄りで何にも知らず、和助はよく知っていたが、お妻と人目を忍ぶ仲で、主人とは持ちつ持たれ

つだ」

「……………」

妾のお妻は屹^{きつ}と顔をあげて、平次を睨^{にら}みましたが、平次の調子があんまり平らかなので、そのまま黙^{もく}つてしまいました。

「五月二十八日の晩、奉公人一同を花火の見物に出した後で、又左衛門は和助と相談して土蔵を破^{やぶ}らせた。釜吉の草鞋などを履いたのは考えた細工だが、素人の悲しさ、せつかく明けた穴が小さすぎた」

「……………」

「が、それでもよかったのだ。泥棒に狙^{ねら}われるからという事にして、石つころを詰めた千両箱を三つ、その日のうちに土蔵から持

出し、この部屋へ置いて主人と和助と佐兵衛が交代で見張りをした。和助が大黃を買つて、お茶へ入れて佐兵衛に飲ませたのは、佐兵衛を便所に立たせて、その後で空っぽの千両箱と入れ換え、罪を佐兵衛に着せる魂胆だった。翌る日石つころを詰めた千両箱を船へ積むわけに行かないから、どんな事をして、夜のうちに、千両箱を空っぽのと換えなければならなかった。床の間の千両箱をただ持出しただけでは、佐兵衛が気が付く。和助と主人の細工は行届いたものだ」

平次の説明も行届きました。誰ももう口をきく者もありません。「大黃はよく効いた。佐兵衛が厠へ立ったのを合図に、和助は予かねて用意した空っぽの千両箱を、石つころ入りの千両箱と換え、そ

の場で主人の又左衛門を強請^{ゆす}つた」

「……………」

恐ろしい緊張、縁側に居並ぶ者は、皆んな固唾^{かたず}を吞みました。

「主人の又左衛門は、三千両の工面が出来ないばかりに、和助とお妻の仲まで大目に見ていたが、この場になつては、さすがに腹を据え兼ねた。——和助の頸筋^{くびすじ}に卷いた手拭に目が付くと、ツイそれに手を掛けて絞めるともなく絞めてしまった」

「それは違う、——とんでもない」

又左衛門は怫然^{ふっぜん}として顔を挙げました。

「和助を殺してしまうと、大急ぎで元の千両箱の石つころを縁の下へブチまけ、それを土蔵の中へ返した。——千両箱の隠し場所

には土蔵の中ほど良いところはない。土蔵の中にある千両箱が、上の三つ四つだけ埃ほこりのないのも、真新しい泥の付いているのもそのためだ。——佐兵衛に箱が減っていないか——と聞いたが、佐兵衛は一つも減っていないと言った。それで千両箱を土蔵へ返したと判った。でなきや、俺は千両箱を捜しに大川へ船を出したかも知れぬ」

「三千両の事とはかく、和助を殺したのは俺じゃない、親分、それは鑑定めがね違いだ」

又左衛門は縁側を叩いてちよつとも引きません。

「よし、それじゃ佐兵衛に訊こう」

平次は障子の後ろにいる佐兵衛を顧みました。

「番頭さんは今しがた向うへ行きましたよ」

と、釜吉。

「何？ 佐兵衛が向うへ行つた、大變ツ、皆んなで捜せ、自害するかも知れぬ、井戸か、土蔵だツ」

平次のあわてようは大變でした。下手人と見られている又左衛門一人だけ残つて、丁稚も小僧も八方に飛びました。

＊

間もなく佐兵衛の死体は永代橋えいたいばしの下流に浮上がつたのです。

「旦那、何とも申し訳がありません。——和助殺しの下手人は佐

兵衛と見当は付きましたが、証拠が一つもありません。——幸い千両箱の細工をした主人の又左衛門を押えてギユウギユウ言わせたら、忠義な佐兵衛が自分から名乗って白状するだろうと思つたのでございます。主人を救うために、飛出して川へ身投げすると気が付きませんでした」

錢形の平次もこの時ほど恐れ入つたことはありません。

「仕方があるまい、どうせ処刑おしおきになる佐兵衛だ」

笹野新三郎は平次の心持を汲んで、深く責めようとしませんでした。

ガラツ八が後で平次にせがんで、例いつもの絵解きをして貰つた時、平次は打ち萎しおれてこう言いました。

「佐兵衛は大坂の本店の番頭だが、三十年も新堀の支店に居て、子供の時から又左衛門を育てた。近頃は少し老耄もうろうくして店の方はあまり構わないが、根が忠義一途いちちずの男で、又左衛門を自分の子のように思っている。それが、千両箱のからくりを知った上、和助が主人を強請ゆすっているのを見て、ツイかつとしたのだろう」

「なる」

「だがな、八、俺はまだ疑うたぐっているよ——。和助を殺したのは、やはり主人の又左衛門じゃあるまいか——と」

「へエ——」

「佐兵衛は主人の罪を聞くと、一言も口をきかずに、身を投げて死んだ。なまじ弁解がましい事を言って細工がばれるより、黙っ

て死ねば主人を助けられると思ったかも知れない」

「……………」

あまりに深刻な推理に、ガラツ八も口がきけません。

「まあいい、俺の手落ちにして、又左衛門を助けてやろう。その代りお妻はあのままにしておけない女だ」

平次はまた大きな失策を一つ重ねました。が、佐兵衛が和助殺しの下手人になって死んだのですから、事件はこれで落着いたわけです。それから八五郎と釜吉が、すっかり良い友達になった事も付け加えておきましょう。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（九）不死の靈藥」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年1月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第八卷」中央公論社

1939（昭和14）年6月28日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1935（昭和10）年6月号

入力：山口瑠美

校正：noriko saito

2016年10月28日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

三千両異変

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>